

二〇二六年度入学試験問題

国

語

(五〇分)

第二回 二月二日実施

〔注意〕 解答はすべて解答用紙に記入しなさい。
問題用紙も提出しなさい。

吉祥女子中学校

— 1 —
次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。字数指定のあるものは、句読点やかっこなどもすべて一字に数えます。

計画をたて、その計画どおり物事をすすめて、順調にそれが進行すれば、あたり前であるが計画したとおりの成果がえられることになる。だから結果をのこすことを最優先するかぎり、計画どおり物事がすすむと安心だ。それが結果への近道だからである。これがわれわれの思考回路に根深く巣くう未来予期にもとづく計画的思考回路だ。しかしこれがあたり前になると計画をたてた時点でそれに安住してしまい、目の前の現実を直視しないという愚拳をおかしがちになる。今日はちよつと嵐だけど停滯したら計画どおりに進まないので無理やり出発しよう、みたいな感じである。

その意味で、われわれは計画のなかに生きているのであって、真の現実^{まのじつ}に没入して、それを経験できているわけではない。現実^{じつ}はカオスなので、かならずしも計画どおりに進行するわけではない。それなのに、計画をたてた時点でわれわれはその計画に存在まるごと絡めとられてしまい、目の前の新しい現実を無視したり、計画とはことなる現実を無理やり計画に適合させて辻褄をあわせる、みたいなことをしがちになる。

② イヌイットが「ナルホイヤ」のひとつで否定しるのは、こうした計画的思考である。彼らは狩猟民なので、最終的に獲物があらわれるかどうかという偶然性^{ぐうぜんせい}に未来がかかっており、存在論的に計画的に物事をとらえることができない生き方をしてきた。^{*}さきほど彼らはわれわれの計画的思考を「戒める」と書いたが、戒めるといふより、そもそもなぜ計画をたてることが可能なのか、そのこと自体、彼らには理解できないことなのかもしれない。

未来を計画することはむずかしいし、そもそも無理である。こうした考え方から、彼らはあるモラルを導きます。

彼らの生のモラルとは何か。それは、自分の頭で考えろということである。決まったやり方などない、そのときの状況^{じょうきょう}に応じてや

注 *さきほど彼らはわれわれの計画的思考を「戒める」と書いたが……出典の引用部分より前の内容をふまえたもの。

り方を柔軟に考えなきゃならん、ということだ。

あまりにありきたりで陳腐な訓戒にびつくりしたかもしれないが、たとえありきたりでもそれを徹底するのは並大抵のことではない。

先にも触れたが、彼らがつとも誇りにする民族的美質は、肉体的な頑強さでもなければ、絶対になしとげる意志の強さや根性でもなく、現場性にもとづく創意工夫と知恵だ。

農業が不可能で、樹木も生えておらず、道具をつくるための資源といえは動物の骨と皮と筋ぐらいしかない厳寒の北極圏で、彼らが何千年にもわたり生き抜くことができたのは、固定観念にとらわれない、融通無碍ともいえる柔軟な発想法をもっていたからである。彼らはことあるごとに頭を人差し指でさし、「俺は頭がいい」とか「俺はよく考えている」などと自慢するし、A 自分の頭で考えないやつは阿呆であり、「ニヤコ・アヨツポ」のひと言で存在価値をまるごと否定する。物事を計画的に考えがちな私などは典型的なニヤコ・アヨツポである。

彼らが重視する現場性にもとづく知恵とは、つまるところレヴィ・ストロースがいうところのブリコラージュの思考だといってさしつかえない。ブリコラージュとは「ありあわせの道具材料を用いて自分の手でものををつくる」ことであり、ブリコラージュする人（器用人）の思考法は計画的な手順をふんで作業を進めるやり方とは対照的だ。

「器用人は多種多様の仕事をやることができる。しかしながらエンジニアとはちがって、仕事の一つ一つについて計画に即して考案され購入された材料や器具がなければ手が下せぬというようなことはない。彼の使う資材の世界は閉じている。そして「もちあわせ」、すなわちそのときそのとき限られた道具と材料の集合で何とかするというのがゲームの規則である。しかも、もちあわせの道具や材料は雑多でまとまりがない。

B 「もちあわせ」の内容構成は、目下の計画にも、またいかなる特定の計画にも無関係で、偶然の結果できたものだからである。」（『野生の思考』大橋保夫訳）

ありあわせのものは、たまたまそのとき、その場にあった資材という意味で偶然の産物である。そしてイヌイットは狩りという、

そのとき、その場に獲物があらわれるかどうかという偶然性のなかに生きる人びとである。狩猟民である彼らは計画的思考とは無縁であり、つねに〈今日の前〉にある状況のなから未来を切り拓く環境のなかにいる。こうした狩猟民的な現場性が道具を製作する場面であらわれるのがブリコラージュだ。

計画的思考回路とナルホイヤ的思考回路、すなわちブリコラージュのちがいがどのようなものかは次のケースをみればわかるだろう。ある日、ヌカッピアングアがノルウェーから来た観光客に白熊の爪をお土産に売ることにした。爪は穴をあけて紐をとおして首飾りにすることで話がまとまったが、その後、ヌカッピアングアは爪を前に、どこに穴をあけようかうーん、うーんとひたすら考えこみ、唸っている。その様子を見て逆に私はうーん、なるほど、と唸った。このささやかなシーンのなかに、ひとつのナルホイヤ的思考法があらわれているように思えたからだ。

もしわれわれのような計画的思考回路の持ち主がこの作業をおこなうとき、どのように考えるかというと、白熊の爪に穴をあけるには共通したあけるべきポイントがあり、それはどんな白熊の爪にもあてはまる、と考えるはずだ。白熊の爪の首飾りなどよくあるお土産品である。だから穴のあける場所などだいたい決まっているはずで、その場所はこの爪にも共通する。それがわかれば、すべての爪の同じ場所に穴をあけて同じような品質の首飾りを次々とつくることができる。だから重要なのは白熊の爪の首飾りに共通する穴の場所を知ること、それを知るためにはほかの爪の首飾りをしらべればよい。

だが、これは無秩序を無秩序として受けとめるのではなく、共通項で分類して無秩序を秩序化する思考法にほかならない。なぜかという、本来、白熊の爪は大きいのもあれば小さいのもあり、やや真つ直ぐなものもあれば、激しく曲がっているものもあるからだ。一人ひとりの人間の爪のかたちがちがうように、白熊の爪もそれぞれ形状、大きさがことなる。現実としてはこのように個別ば

注 *融通無碍……何かにこだわることなく、思考や行動が自由であること。

*レヴィ・ストロース……フランスの文化人類学者で後出の『野生の思考』の著者。

*ヌカッピアングア……イヌイットの人名。

らばらで渾沌こんとんとしているのだが、しかしこの渾沌をあるがままに受け止めていては作業効率が悪いので、白熊の爪に共通する最大公約数的な項目をとりだして「白熊の爪」ということでカテゴリー化してしまったほうが話がはやい。要するにこの考え方の根本には、現実を共通項で分類して、そこからはみ出した無秩序は切り落としてしまい、均質化してとらえなおそうという効率優先の思考法がある。

当然この思考法には長所があり、ひとたびカオスを均質化してとらえると個別ばらばらな爪に同じやり方が適用できるので、似た品質のものを大量生産できるようになる。作業効率が大幅に改善して生産性が高まり、社会全体が潤うだろう。人口が増えて国力が高まり戦争にも勝てるかもしれない。しかし欠点もあり、このような思考法で物事を処理してしまえば、結果的にはそのときどきの現場で考えるという個々人の試行錯誤しこうさくごの経験がうばわれる。これを煎じ詰めれば社会はどんどん豊かになり発展する一方、個々人の能力は劣化し、知恵が衰退し、実存も陥没し、社会の歯車となり、生きていてつまらなくなる。共通項を見つけて分類して解決する思考法は、その場で考えるという「知恵」よりも、共通した解決策を見つけたほうが速いという「知識」を優先させることにつながり、自分以外の誰かが発明した解決策を見つけて対処したほうが合理的だという習慣をつくりだすだろう。「知恵」ではなく「知識」にもとづいた解決は、たしかに全体的な効率はいいものの、イヌイット的には自分の頭で考えたものではないので、価値は低く、ニヤコ・アヨッポなのである。

⑦ イヌイットは白熊の爪をつくるときもそれをカテゴリー化しない。ヌカッピアングアがうーん、うーん唸っていたのは、その白熊の爪に、共通項でくくった「白熊の爪」なるカテゴリーをフィルターとしてかぶせずに、あくまで世界でただひとつしか存在しないその白熊の爪として、それと真剣しんけんに対峙たいじしていたからだ。彼はこれまでいくつもの爪の首飾りをつくってきたはずだが、その爪は、それまでのどの爪ともことなる長さや曲がり方や模様をもった、分類不可能な唯一無二ゆいいつむにの爪として、今、目の前にある。ほかの爪とちがう以上、この爪にのみ適用される最適なポイントがあるはずであり、それはこの固有の爪にはじめて接した今、考えなくてはならないことだ。これまでの穴あけ作業のやり方は通用しないので、彼は唸り、悩んでいたのだ。

もちろんこうした解決策は、すべての爪を前にいちいち悩まなくてはならず、全体的な意味での効率が悪くなるが、しかしその爪にとつての最適な場所を見つけることはできるので個別的な意味での効率はよくなる。ありあわせのものしか手に入らない環境で生きのびるために、彼らはその状況でベストの解決策を見つけないという思考法を身につけるしかなかったのである。

ナルホイヤ的思考法とは、〈わからない〉という一言で現状の無秩序を認め、そのうえで今日の前でおきた物、あるいは目の前にある素材にのみしたが、この無秩序を解決しようとする態度のことである。今日の前でおきることは事前に未来予期できるものではなく、その意味ではたまたまそのときに生じた偶然だ。世界とは今、目の前で発生している状況のことであり、偶発事のつらなりであるという考え方こそ、ナルホイヤでいいあらわされる世界観である。だから彼らの考え方では固定観念というものが育ちににくい。

事物事象を共通項で分類し、物事を計画的に進めようとするわれわれは、モノにはそのモノに即した〈向き〉があると考え。机は机として使用しなければ机としての用はなさない。机のうえにしゃがみこんでいくら踏ん張^ふっても机が便所として機能するわけではなく、虚^{むな}しいだけだ。つまり机には机ならではの向きがあり、その向きにしたがって使用してあげなければ机は机として存在できない、という向きである。同じように鋸^{のこぎ}には鋸の向きがあり、ハンマーにはハンマーの向きがある。この向きにしたがってわれわれはその道具を理解し、使用する。しかし、このような世界把握^{はあ}は固定観念というものを生みだすことにつながる。机には机の向きがあるから、そのように取りあつかわなければならないという固定観念だ。

⑨ ところがイヌイットのナルホイヤ的思考は、今日の前にあらわれた状況を、そのとき固有のものとしてとらえる柔軟さを本性とするため、このような固定観念から解放されている。机には机の向きなどない、というのが彼らの発想だ。なんなら鋸で切断して便所にしてしまえばいいわけだし、そのために使う鋸だって鋸の向きなどない。それはただのギザギザのついた金属のプレートであるわけだから、熱して目玉焼きをつくったってかまわないのだ。

問一　~~~~~線ア「陳腐な」・~~~~~線イ「煎じ詰めれば」とはどのような意味ですか。もっとも適当なものを次の1～4からそれぞれ一つ選び、番号で答えなさい。

ア「陳腐な」

- | | |
|---|------------|
| 1 | 単調で面白くない |
| 2 | あさはかでくだらない |
| 3 | 形式的で中身がない |
| 4 | 普通でつまらない |

イ「煎じ詰めれば」

- | | |
|---|----------------|
| 1 | 究極のところまで考え進めれば |
| 2 | 分かりやすく言い換えれば |
| 3 | 視野を広げて考えてみれば |
| 4 | 自由な発想で考察してみれば |

問二　——線①「未来予期にもとづく計画的思考回路」に沿って物事をとらえると、「われわれ」はどのような考え方をするように

なりますか。その説明としてもっとも適当なものを次の1～4から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 結果を出すことを最優先にして立てた計画を進めることにこだわり、現実を軽視しがちになる。
- 2 あらかじめ立てた計画を順調に進めることを重要視し、結果については問題にしくなくなる。
- 3 たとえ慎重に計画を立てても計画通りには進まないだろうと悲観的に予測するようになる。
- 4 計画通りに事を進められさえすれば事前の設定以上の成果が得られると期待するようになる。

問三 ―― 線②「イヌイットが「ナルホイヤ」のひとつで否定しざるのは、こうした計画的思考である」とありますが、イヌイット

が「計画的思考」を否定する理由としてもっとも適当なものを次の1～4から一つ選び、番号で答えなさい。なお、「ナルホイヤ」とは「わからない」という意味です。

1 イヌイットの生活を支えるために狩りを成功させるには、本人が実際に動物を捕らえる経験を積むことしかなく、計画に左右されずに目の前の現実を目を向ける必要があるから。

2 イヌイットの生活を支える狩りにおいては事前に展開を预期することでかえって失敗を招くことがあるので、現実だけに集中して対策を立てた方が結果的に効率が良いから。

3 いつどこに現れるか予測できない獲物を狩ることで生活を成り立たせてきたイヌイットが注目するのは目の前の現実であり、未来に目を向ける考え方は無意味なものだから。

4 獲物があることを前提とする考え方ができるのは安定的に食料が確保されている状況に生きる人だけであり、イヌイットのよう

問四

A

B

にあてはまる言葉としてもっとも適当なものを次の1～5からそれぞれ一つ選び、番号で答えなさい。同じ番号をくり返し使ってはけません。

1 しかしながら 2 逆に 3 つまり 4 もちろん 5 なぜなら

問五 ——— 線③「閉じている」とはどのような意味ですか。もつとも適当なものを次の1～4から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 他者と相談することはせず自分独自の考えで物事を進めるという意味。
- 2 外部から手に入れることはせずその場にあるものだけを使うという意味。
- 3 選べる方法が限られており新しい可能性は開かれていないという意味。
- 4 既に用意が万全に整っていてこれ以上手を加える必要はないという意味。

問六 ——— 線④・⑤「うーん」は、それぞれどういう様子を示していますか。もつとも適当なものを次の1～6からそれぞれ一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 不満
- 2 困惑
- 3 苦心
- 4 許容
- 5 驚嘆
- 6 合点

問七 ——— 線⑥「共通項で分類して無秩序を秩序化する思考法」とありますが、

- (1) この思考法に基づいた行動の具体例としてもつとも適当なものを次の1～4から一つ選び、番号で答えなさい。
 - 1 景観を向上させるために、道路沿いの花壇に赤白の花を交互に植え、定期的に水やりや手入れを行う。
 - 2 収穫した野菜を大きさにS・M・Lに仕分けし、それぞれの大きさに応じた値札を貼っていく。
 - 3 マラソン大会に向けて、週ごとの目標を設定し、それを達成するための毎日の練習スケジュールを作成する。
 - 4 大勢が集まる花火大会では、混乱や事故を防ぐために、駅から会場までの道順を設定して交通整理を行う。

(2) この思考法がもたらす結果についての説明として正しくないものを次の1～6から二つ選び、番号で答えなさい。

- 1 各自が臨機応変に困難な問題に対処する機会が得られなくなる。
- 2 兵力が増強され、戦争を歓迎する雰囲気かんげいきが形成されるようになる。
- 3 生きる喜びが失われ、自分の人生に手応えを感じられなくなる。
- 4 自分で考える習慣がなくなるために、個々人の能力が衰えるおとし。
- 5 物づくりにおいて、品質の安定と大量生産が可能になる。
- 6 生活水準が向上する一方、苦境に置き去りにされる人々が出る。

問八 ——— 線⑦「イヌイットは白熊の爪をつくるときもそれをカテゴリー化しない」とはどういうことですか。もつとも適当なものを次の1～4から一つ選び、番号で答えなさい。

を次の1～4から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 イヌイットは白熊の爪に似せた土産物を制作するにあたって、さまざまな爪に共通する最大公約数的な特徴とくちょうをもとにつくるのではなく、自分の頭で考えて最善の首飾りをつくろうと試行錯誤すること。
- 2 イヌイットは白熊の爪の首飾りをつくって売ろうとするときには、それを土産物品として他の品物と同列に扱うあつかのではなく、白熊の爪からしかつけない特別なものとして念入りに考えて販売はんばいをするということ。
- 3 イヌイットは白熊の爪を観光客のお土産として売る際に、すべての爪を同じように扱うのではなく、さまざまな形状の爪の中からもつともふさわしいものを選び、世界でひとつのものをつくろうとするということ。
- 4 イヌイットは白熊の爪を使ったアクセサリを制作するときも、すべての白熊の爪に同じような細工をするのではなく、ひとつずつ調べ、それぞれの爪の最良の場所に穴をあけるために思考を重ねるということ。

問九 ———線⑧「このような世界把握^{はあく}」として正しくないものを次の1～4から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 モノには適性があり、それに従うことが大切だ。
- 2 モノにそなわった機能に、そのモノの価値がある。
- 3 人にはモノを使いこなすのに、向き不向きがある。
- 4 人がモノを扱うためには、対象への理解が必要だ。

問十 ———線⑨「イヌイットのナルホイヤ的思考は、今日の前にあらわれた状況を、そのとき固有のものとしてとらえる柔軟さを本性とするため、このような固定観念から解放されている」とありますが、このような思考法で目の前の問題を解決する具体例を考え、八十字以上九十字以内で説明しなさい。

二

次の文章は、明治の初め、長崎の浦上^{うらかみ}で信仰^{しんこう}を守り続けてきた隠れキリシタンたちが、罪人としてとらえられ、各地に流されたときの話です。これを読んで、後の問いに答えなさい。字数指定のあるものは、句読点やかっこなどもすべて一字に数えます。なお、問題の都合上、もとの文章から一部省略した部分があります。

あくる日の御用^{*ごよう}には、一同そろってお寺のまえの広場にひきだされた。これまで見かけなかった役人が三人もくわわって、お寺の縁^{えん}がわから、みんなに話しかけた。

そして、さきに長崎をでたはずの男の信徒たち二十人が、その日の夜明け、岡山についたことを知らされた。父や、夫、兄たち、それぞれ家族の戸主たちであった。^{*}

しかし、これまでのでたらめな人くばりから考えても、はたして自分たちの父や夫がきているものかどうか、目でたしかめるまではわからない。

「お役人さま、みなぶじでおりましようか。あわせてはくださらないのでございますか。」

ひとりの老人がたずねた。

「おう、あわせるぞ。いつでもあわしてやるとも。^①おまえたちの心がけさえよろしければな。」

役人は意味ありげにみんなの顔をうかがった。

「心がけと申しますと……」

「ええか、馬を川までつれてくるのはたやすいこと。だが、馬に水をのませるのはむづかしいわな。馬が水をほしがらんなら、いく

注 *御用……役人の取り調べを受けること。

*戸主……一家の主人。

らのめと申しても、馬には水をませられぬ。^②おなじじゃ。お上がせっかくここまでおつれくださったのに、おまえたちがあいたくないと申すなら、どうすることもできぬわな。」

「あわせてくださいと、これこのとおりお願い申しているのでございますよ、お役人さま。」

「では、そのほうたち、キリシタンをすてるか。なら、いつでも好きなきにあわしてやる。」

「それはできません。」

老人はきっぱりといいきった。

「ほれほれ、その心がけがなおらぬかぎり、わしらにも、どうすることもできぬわな。」

「心がけではございませぬ。いのちをかけての信仰でございます。すてるわけにはまいりません。」

「なにつ……いわしておけばいい気になりおつて、このふるぎつねめ。」

役人は縁がわからとびおりてくると、老人をむちうち、足でけころがした。

もちろんこの老人の反抗^{はんかう}のためだけではなかったが、その日、信徒のなかから十五歳^{さい}以上の男子がよりわけられた。それは十人だったが、なんの説明もなくその場から川船にのせられ、旭川^{あさひかわ}をさかのぼってつれさられた。その老人もいっしょだった。けさついた男の信徒たちのいる岡山城内の牢^{ろう}におくられたのである。あとには文字どおり、女と子どもだけがのこされることになった。

この日から、信徒^③たちには仕事^③がわりあてられた。毎日なわを二百尋^{ひう}なわなければならぬといいわたされたのである。

一尋は六尺、一・八メートル、二百尋は三百六十メートルのなわである。子どももいる。長い旅でよわりはて、動けない老人もある。はたらけるものは夜どおしいつづけて、やっとまにあうほどの長さだった。

夕方、食事まえに番人がきて、その長さをしらべて持つていく。すこしでもたりないと、夕食ははこばれない。

食事はあいかわらず茶わん一ぱいの麦としょうゆかすか、たくわんの一きれである。

(中略)

たみの母のまんは、いうのだった。

「わしらは一人まえに、はたらけんでな、みんなで食べておくれ。」

そして、三度に一度は自分のごはんをみんなにくばるのだった。

「おかあさん、そんなことしたら、おかあさんがまいってしまいます。おかあさんだっていっしょうけんめいはたらいとなさるに。」

たみの妹のふみがいった。

「いいえ、いいのよ。それより、おふみ、いいもの見せようかの。」

まんはそういうと、ふみをへやのすみによんで、そっと小さなふくろをひらいて見せた。

「どうしたの、これ。」

その小さなふくろには、お米がはいっていた。

*
「デウスさまのおめぐみだい。」

「でも、どうして。」

ふみにはわからなかった。

④
「老人の知恵^{ちえ}だい。」

まんはそういつて説明した。まんは、なわをなうためのわらがはこばれるたびに、たんねんにいねの穂^ほのところをしらべるのだつた。すると、一本の穂に、かならず一つぶや二つぶのふみがついている。たいていは実のはいらぬもみだったが、まともなもみもついている。それを一つぶ一つぶだいにたもとにしまつて集めたものだった。

注 *デウス……ラテン語で「神」をさす。

「これが、みんなにくばれるほどにたまったら、米のごはんばたこうと思うてな。だれにもそれまでだまっていとくれよ。いつごろそのくらいたまるかね。イエズスさまの、ご復活の祝日まで、たまるとええと思うとるんよ。」

そういうまんのほはおち、動作はいかにもたいぎそうだった。

「おかあさん……」

⑤ ふみはまんの顔を見つめたまま、それ以上なにもいえなかった。

いく日かがすぎた。なわなにも要領がよくなって、なんとか毎日の分をないつづけることができたが、一日に二、三人ずつ御用によびだされて、改心をせまられた。

あるものは食べものでつられ、あるものには、夫や父にあわせるといい、長崎へ帰すともいった。そして、ある日、御用から帰ってきたひとりは、みんなのところへ帰ると、へなへなとすわりこんでいったのだった。

「ころんだとよ。みんなころんだとよ。お城の牢にいる人たち、みんなころばされたと……」

「そんな、そんなことがあるかね。わしらもこうして、こんなにこらえてるに……」

夫や父がころんだという知らせは、空腹よりもなによりもみんなの力をおとさせてしまった。

⑥ その日は夜中をすぎても、なわの長さはたりなかった。

毎日のきびしい御用、明けてもくれてもつづくなわない、いつ満たされるとも知れない空腹、それをこれまでこらえてこられたのは、たしかに信仰のためであった。

しかし、そのときどきのくるしみをのりこえる現実のささえとなったのは、自分たちの夫や父、子どもたちが、おなじくるしみをこらえていると思えばこそだった。

その父や夫、子どもたちが、のこらずキリシタンをすてたという。みんなの心の中で、なにかガラガラと大きな音をたててくずれていくのがわかるのだった。

「自分はころぶのかもしれない。いや、自分にはもともと、信仰などなかったのではないか……」

こうした不安がだれもの心の中にわいた。その不安を、自分にむけているうちはよかった。だが、人間は、自分の不安におののき、それをうちけしたいために、無意識にそれを他人にむけてしまう。他人が自分よりすこしでも罪ふかいことをのぞんでしまうのだ。

松寿寺しょうじゅじの信徒のあいだに、かなしいできごとがもちあがったのは、そのあくる日のことだった。

いつか千吉がもらってきたなまぐりを、深夜ひそかにかじっていた、あのあわれな音をきいたのは、たみだけではなかった。いく人かのものがそれをたみとおなじように悪魔あくまの音のようにきいたのだった。だが、だれもが自分の耳をうたがい、その音から自分が想像したことをわすれようとした。あくる日になっても、だれもそのことにふれるものはいなかったのだ。

だが、^⑦いく日もたったいまになって、あの悪魔の音がよみがえってきた。

「くりばひろうて食べたのはだれね。わしらにはちゃんとわかっとなるのよ。」

この口にしてはならなかったことがきっかけになって、信徒のなかにはげしい口あらそいがおこったのだ。

くりをひろって食べたとき、きめつけられたのは、ちのみごとを持つ母親であった。それはたしかだった。そのとりにねていた、おゆきという十六の女の子は、それをちゃんと知っていたのだ。

おゆきは、その母親の顔がみるみる青ざめていくのを、もうそれ以上じっと見ていることができなかった。

^⑧「あの夜、くりをひろって食べたのはわたしです。それがどうしたというの。あの一つぶのくりを、みんなにわけろというの。それとも……」

おゆきの口はいかりにこわばって、あとがつづかなかった。

「おゆきさん、おゆきさん、なにをいうの。」

ほんとうにくりを食べた母親が、あわててそれをとめようとした。

「あんたな、だまってるじゃない……わたしはキシタンでもなんでもないのよ。いいえ、いまのいままで、そうだったわ。でも、もうちがうの。わたしはたつたいま、ころんだのよ。これから、お役人のところへ行くわ。そして、あしたから、たーんとごはんを食べさせてもらうわ。あんたらのまえで、うーんとうーんとおいしそうに食べてやるわ。もうころんだもの、やかましかこと、なーもいわんでくださいよ……」

おゆきはそこまでいうと、わっと泣きくずれてしまった。^⑨自分のいったことに、自分でこわくなっていたのだ。

「おゆきさん、まって。いけないわ、そんなこというたらいけないよ。ころぶだなんて。」

たみがみんなをかきわけて、泣きじゃくるおゆきのところへ行った。

「あねさま、いや、もういやです。なにもかも。わたしはもうだめなのよ……」

おゆきは、たみのうでにすがるようにして、いつそう声をあげて泣きだした。

そのときだった。

「なにごとじゃ、わいわいと泣きおって。お客さんだぞ。」

番人がそとから声をかけた。

お客さん——それがなんのことか、すぐにはだれにもわからなかった。

「おーい、あけんか、病人じゃ。」

番人はいつでもだまってるどやどやとはいってくるのに、声ばかりがして、はいつてこない。

「はい、ただいま。」

三人ほどのものが、あわてて立って木戸をひらいた。すると、そこには、ふたりの番人が戸板をかついで立っていた。戸板には、

ごぎをかけられて、だれかがねかされている。男であった。

「どなたです。どうしなさったとです。」

「病人じゃ。こいつのむすめがおろうが。看病してやれ。」

番人はそういうと、土足のままへやにあがって、へやのまん中に戸板をどさりとおいて出ていった。

「だれね、だれね。」

みんながそのまわりに集まった。

「あつ、これは……治右衛門さんじゃ。おゆきさん、おゆきさん、おとうさんじゃないか……」

まんがおどろいてさげんだ。おゆきがとんできた。

「お、おとうさん、どうしなさった。おとうさん、どげんしなさったと。」

おゆきはごぎをはがした。治右衛門ははじめて目をひらいた。だが、のぞきこむみんなをじっと見つめるばかりだった。顔は見ちがえるほどやせこけていた。いくつもきずがあった。

「……おとうさん。」

おゆきがもう一度声をかけながら、そのきずをいたわるように、手をかけようとした。

すると、治右衛門は、はじめて口をきいた。

「おゆきなど、わしは知らん。だれも知らんぞ。ゼンチョ（異教徒）ときく口など持たんわ。くたばれ、悪魔どもめ。」

かすれたひくい声であったが、その目はするどくひとりびとりをにらんでいた。

「おとうさん……」

おゆきが顔を近づけようとすると、治右衛門はおゆきの顔をはらいのけた。

「治右衛門さん、あなたのむすめさんのおゆきさんですよ。どうしなさったのです。」

たみが大きな声で治右衛門にいった。

「むすめじゃなか。ころぶようなやつはわしらのむすめじゃなか。」

「いいえ、おゆきさんは、ころんだりしませんよ。だれも、ころんだりしませんよ。」

「うそいえ、このゼンチョめ。」

「治右衛門さん、おちついて、どうしてそんなことをおっしゃるとです。」

「かくしてもわかつとる。ここにいるやつはみんなころんだのじゃないか。」

治右衛門のそのことをきいて、みなどきりとした。しかし、治右衛門はさきほどのあらそいなど知っているはずはなかった。すべて役人たちの計略だったのである。¹⁰

（今西祐行『浦上の旅人たち』）

問一 ― 線①「おまえたちの心がけさえよろしければな」とありますが、これはどうすることを求めているのですか。「……こと。」に続くように、五字以上十字以内で文中からぬき出して書きなさい。

問二 ― 線②「おなじじゃ」とありますが、どのような点で同じだということですか。次の文章の ☒ にあてはまるように、十五字以上二十字以内で書きなさい。

馬も人も、☒ 点で同じであるということ。

問三 ― 線③「信徒たち」とは誰のことを指しますか。もつとも適当なものを次の 1～4 から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 反抗した老人を含む十人の男子。
- 2 十人の男子を加えた牢の中の信徒。
- 3 よりわけられた十人以外の信徒。
- 4 各地に流されたすべての信徒。

問四——線④「老人の知恵」とありますが、「まん」はどのようにしてお米を集めましたか。次の1～5の文は、その過程を具体的に説明したものです。ただし、二つ不要なものがあります。それらを除いた三つを正しい順に並べ替え、その番号を順に書きなさい。

- 1 役人たちが持っている大量の稲わらをひそかに手に入れる。
- 2 稲わらの先端を見て実のある稲もみがついているか調べる。
- 3 使わない稲わらの中から食べられそうな稲もみの粒を探し出す。
- 4 なわをなうための稲わらが信徒たちのもとへ運ばれてくる。
- 5 実の入っている稲もみの粒を一つ一つ集めてふところにしまう。

問五——線⑤「ふみはまんの顔を見つめたまま、それ以上なにもいえなかった」とありますが、このときの「ふみ」の状況としてもっとも適当なものを1～4から一つ選び、その番号を書きなさい。

- 1 自分の食事を皆に配ることに加えて米粒を集めて貯めておく母の自己犠牲的な行動に深く心を動かされ、復活の祝日に向けて自分にも何かできることはないかと考え始めている。
- 2 自分の食事を分けてくれる母の行動はまだ想像できるものであったが、復活の祝日のために米粒を集めるという行動は思いもよらないものであり、母の発想力の豊かさに感嘆している。
- 3 自分の食事を皆のためにほとんど分け与えながら自分はわずかな米粒をかじってしのいでいる母に対し、復活の祝日でさらに働くことは無謀だと感じ、母の考えを変えさせる方法を模索している。
- 4 食事をとらず身体を弱らせながら皆のためにわずかな米粒を集める母に対し、復活の祝日までに十分な量を集めることは難しいと思ながらも、母の意志の強さを思うと止めることもできずにいる。

問六 —— 線⑥「その日は夜中をすぎても、なわの長さはたりなかった」とありますが、それはなぜですか。五十字以上六十字以内で説明しなさい。

問七 —— 線⑦「いく日もたつたいまになって、あの悪魔の音がよみがえってきた」とありますが、それはなぜですか。もつとも適当なものを次の1～4から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 深夜に音を聞いた時には誰がくりを食べたのか確信が持てなかったため皆黙^{だま}っていたが、日が経^たつにつれて犯人の見当がつくようになり、信徒たちの間で犯人の罪を問いたださなければならないという雰囲気^{ふんいき}が高まってきたから。
- 2 仲間が誘惑^{ゆうわく}に屈^{くつ}してくりを食べたという事実を認めたくなくて誰もそのことを口に出さないでいたが、信徒たちの間に動揺^{どうよう}と不安が広がった今、他の人の罪を暴^{あは}くことで自分の後ろぐらさから目を背^{そむ}けようとする心理が働いたから。
- 3 くりをかじる音を聞いたときには皆聞こえない振^ふりをしていたが、それから数日経った今、信徒たちの空腹感が切実になるにつれてくりを食べたことに対する恨^{うら}みがよみがえり、犯人を明らかにしたいという気持ちが高まったから。
- 4 当初は仲間をかばいたいという気持ちからくりを食べたことを誰も追及^{つい}しないでいたが、毎日厳しい御用^{ごよう}と辛い^{つら}いなわなが続く中で、信徒たちの間に自分の苦しみを誰かにぶつきたいという暴力的な衝動^{しょうどう}が高まってきたから。

問八——線⑧「あの夜、くりをひろって食べたのはわたしです」とありますが、このときの「おゆき」の気持ちの説明としてもつ

とも適当なものを次の1～4から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 幼い子供を抱えた母親が責められるのを見ることに耐えられず、同じ苦しみを味わいながら仲間を責めてしまう人びとや、そこまで人びとを追い込んだ状況に対する怒りを抑えられずにいる。
- 2 何の証拠もないのに弱い者を犯人だと決めつけて責める理不尽さに怒りを感じ、自分だけしか母親を守ってあげられる人はいないのだという正義感によって、罪を背負う恐怖をも忘れている。
- 3 くりを食べていることを知っていながら黙っていた点で自分も同罪だと考え、ちのみごを育てていかなくはない母親が罰せられるより、自分が肩代わりするほうがましだと考えている。
- 4 信仰を持ちながら人を責めてしまう人びとの心のあり方に疑問を感じ、自分だけは苦しみに惑わされず正しい道を進むのだという決意を、母親をかばうことで自分自身に示そうとしている。

問九——線⑨「自分のいったことに、自分でこわくなっていた」とありますが、このときの「おゆき」の感じている「こわさ」はどのようなことに対するものですか。その内容としてふさわしくないものを次の1～4から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 自分がずっと信じてきたものを否定し、ひどい言葉を言ってしまったこと。
- 2 共に苦しみに耐えてきた仲間たちを裏切り、自分だけ楽になるということ。
- 3 母親をかばうために口にした中に、自分の願望が含まれていると気づいたこと。
- 4 ひそかに感じていた仲間への不満を、自分勝手にぶつけていると自覚したこと。

問十——線⑩「役人たちの計略」とはどのようなことですか。五十字以上六十字以内で説明しなさい。

三

次の1～6の——線のカタカナを漢字で書きなさい。

- 1 空にアンウンが立ち込めていた。
- 2 多数の学校の校長をレキニンする。
- 3 この法案が今後のセイキヨクを左右する。
- 4 国境をケイビする。
- 5 弱点をオギナうために練習する。
- 6 この地域ではヨウサン業が盛んだ。

問題は以上です

問一	ア		イ	
問二				
問三				
問四	A		B	
問五				

問六
④
⑤

問七
(1)
(2)

問八

問九

[illegible]

問一	
5	
10	
	こと。

[illegible]

問三	
----	--

問四	
↓	
↓	

問五	
----	--

[illegible]

問七	
問八	
問九	

[illegible]

4		1	
	ケ イ ビ		ア ン ウ ン
5		2	
	オ ギ ナ う		レ キ ニ ン
6		3	
	ヨ ウ サ ン		セ イ キ ヨ ク

11

11

10

□

11

10